

8711 子供を背負った貧しい主婦が・・・

子供を背負った主婦がまるで物乞いするような格好で先生の玄関先に立ったら、おそらく門前払いをくうのではないかと思ったのですが、石原先生は私を応接間に通して下さって、喜んで質問に応じて下さったのです。で、私はそのとき、よもや自分は有名になることはあるまいが、もし間違って将来有名な人間になったとして、どなたかが訪ねてきて下さったとき、せわしいからお目にかかれませんなどとは決していうまいとおもいましたね。

森本 肇郎『ぼくの人間手帳：真理は生命一住井すえ』

〔許容訳例〕

I imagined that if a poor housewife with her baby on her back appeared at the front door as though begging, Mr. Ishihara would shut the door in her face, but he showed me to the drawing room and answered my questions willingly. I resolved at that time that, though I would probably never be famous, if ever I happened to become celebrated and someone came to see me, I would never say that I was too busy to see him.

〔翻訳例〕

I had imagined that if a poor housewife with a baby on her back appeared at his front door as though begging, she would probably be turned away unceremoniously, but in fact Mr. Ishihara showed me into the drawing room and seemed happy to answer my questions. I resolved at the time that although I was most unlikely ever to be famous myself, if by any chance I should ever become a celebrity I would never tell someone who was good enough to call on me that I was too busy to see him.

■子供を背負った主婦がまるで物乞いするような格好で先生の玄関先に立ったら、おそらく門前払いをくうのではないかと思ったのですが、石原先生は私を応接間に通して下さって、喜んで質問に応じて下さったのです。(8711)

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(子供を背負った貧しい主婦)

「子供を背負った貧しい主婦」は、「連体修飾節(子供を背負った) + 不定代名詞的体言(貧しい主婦)」なので、英語では「名詞(a poor housewife) + 関係詞節(who was carrying a baby on her back)」ですが、who was ...ing の場合、who was は省略することが出来ますし、更に...ing は with に変えることができるので、a poor housewife with [carrying] a [her] baby [child] on her back となります。なお、辞書には「主婦」に homemaker も出ていますが、この言葉は「役割、機能」を表わすような感じですから、ここでは不適切です。

★「まるで物乞いするような格好で」では、具体的な「格好」よりも「まるで物乞いするように」に力点があると考えができるので「格好」にこだわらず as if [though] (she were [was]) begging (for something) とします。なお、ask (for) [beg] (an) alms は英語として間

違いではありませんが古すぎます。何だか中世の頃のような感じになります。

●文技巧（先生の玄関先に立ったら）

「先生の玄関先に」の「先生」は後に出て来る「石原先生」ですが、まだ名前が出て来ないので「石原先生の」と入れるわけにはいきません。the front door でも間違いではありませんが、これから出て来るという信号として人称代名詞の所有格を使うことが出来るので「彼の（家の）玄関先に立ったら」として his を使うことは出来ます。したがって、「彼の玄関先に」として at his front door とか at the entrance of his house とかがいいでしょう。

★「立ったら」というのは「(何処からか来て)(玄関先に)立ったら」ということですから、上の文で端折った「格好」を生かして「(何処からか来て)(玄関先に)現われたら」として appeared at his front door [at the entrance of his house] とするといいと思います。なお、「立った」に stood は使えません。これは「立ち上がった」か「立ち上がっていた」という意味で用いるのが普通です。もう少し日本語の意味に近いものにするとしたら stationed herself とすることも出来ます。station oneself という表現は take up a position ということで、「何かの目的をもって～に身を置く」という意味合いになり、「そこから容易には動かない」というニュアンスもかすかに入っています。

★「おそらく・・・ではないか」は、五分五分の可能性より多いのが普通ですから、「多分[おそらく]・・・だろう」と解釈して would (probably)…がいいでしょう。might は「・・・かもしれない；・・・ということもありうる」ですかられます。might well...なら「・・・という可能性が十分考えられる」となりいいと思います。

★「門前払いをくう」のはここでは主婦ですから「(彼女は)門前払いを食わせる」と受動態となって be turned away unceremoniously となります、turn away unceremoniously というのは一つの set phrase に近い表現ですが、unceremoniously は roughly; rudely, つまり without any politeness at all という意味になります。なお、Mr. Ishihara を主語にするなら shut [slam/ bang] the door in someone's face を使うことが出来ますが、she を主語にすると she would probably have the door shut [slam/ bang] in her face のようにめんどうな表現になるので避ける方がいいでしょう。なお、shut の代わりに close は使えません。shut が「閉める」という動作を端的に示すのに対して close は「(外から見えないように)閉める」というような、何か目的とか理由があつて閉めるというニュアンスが入ってきます。

★「・・・と思った」は、もう少し後を読むと「・・・と思ったのですが、(実際は)・・・であった」というコンテックストです。こういう場合には時間の経過をはっきり出して「過去完了(古い過去) + 過去時制(新しい過去)」としたほうがいいでしょう。特に「思う」に think という動詞を使うならその方がいいです。I thought that…は「・・・と(その時)思った」の意味が普通ですから使うなら I had thought that…です。しかし、この場合、最も英語らしいのは imagine を使うことです。I imagined…は大抵「・・・と思っていた」という意味になるからです。したがって、ここは I (had) imagined that…とするのが一番いいです。

● [が] (逆接)

「・・・です [が]」は「逆接」ですから but でいいのですが、内容的には「思い掛けず」というニュアンスが含まれている感じなのと、I (had) imagined と離れるので、コントラストをはっきりさせるために but in fact したいです。

★「石原先生は私を応接間に通して下さった」は、先生本人が通したのであるなら Mr. Ishihara showed me into [let me in] the drawing room. であり、先生本人以外の人、たとえば、奥さんとか女中さんとかに通させたのであるなら Mr. Ishihara had me shown into the drawing room. です。なお、show の代わりに introduce(本来入れてはいけないものを入れる e.g. A boy introduced his pet rabbit into the classroom.)とか、guide(一つ一つ説明しながら案内する)とか、usher(丁寧に席に案内する)などは、ここでは使うことは出来ません。

● [て] (～に通して下さって)

「応接間に通して下さっ [て]」は「動作順次」ですから and でいいと思います。

★「喜んで」は willingly の他に gladly とか readily も使うことが出来ますが、ちょっと弱いような気がします。「喜んで・・・してくださった」にはもう少し積極的な意味が込められているように感じられるので、発言者の主観的感想として (he) seemed happy [delighted] to... と訳した方がいいと思います。なお、辞書には「喜んで」に with (a) good grace が出ていますが、これはちょっと「(しぶしぶ；どうにも仕方なく；不本意ながら) いさぎよく」というニュアンスが入った表現だと思います。

★「(私の) 質問に応じる」は answer my questions です。

■で、私はそのとき、よもや自分は有名になることはあるまいが、もし間違って将来有名な人間になったとして、どなたかが訪ねてきて下さったとき、せわしいからお目にかかりませんなどとは決して「あるまい」とおもいましたね。 (8711)

● [で] (軽い因果)

「[で]、私は・・・」の [で] は、かすかに [それで] が含まれているように感じられますが、so ではちょっと強すぎます。何も入れないか、あるいは and くらいです。

★「そのとき」は at the [that] time です。

● [よもや・・・あるまいが] (譲歩)

「よもや自分は・・・あるまいが」は「よもや・・・」が強い仮定を表しています。「万が一にも自分は・・・ないだろうけれども」と考えて「よもや・・・にない」に probably [certainly] never...; almost certainly never...; most unlikely ever to... を使って although I would probably [certainly] never...; although I would almost certainly never... (myself); although I was most unlikely ever to... (myself)などとします。なお、(al)though の代わりに but を用いることもできますが、文が切れてしまうので使わない方がいいです。

★「有名になる」は become famous です。

● [もし間違って・・・として] (強い条件)

「もし間違って・・・として」の「間違って」は「万一」の代替え表現と考えて「もし間

違って将来有名な人になったとして」は「万一将来私が・・・になって」と考えると, if I happened to…では弱いので, Should I by any chance [If by chance I should]…とか, あるいは Supposing by some chance I should… [I…]とかになります. なお, if…の場合は仮定ですから by (any) chance ですが, supposing は一応想定するとということですから by some chance となります. 他には if ever I happened to…も可能です.

★「将来」は in the future です.

★「有名人になる」は become famous ですが, 同じ表現を二度使うのは好まれませんから become celebrated とか, 「有名人」にこだわるなら become a celebrity にするといいでしよう.

★「どなたかが訪ねてきて下さった」は somebody came to see me でいいのですが, 「・・・きて下さった」という言い方には「せっかく来てくださったんだから (たとえどんな人でも会ってあげましょう」というニュアンスが入っているような気がするのであれば was good enough to を加えて somebody was good enough to see [call on; come calling on] me とするといいでしよう.

★「せわしいからお目にかかりません」は「忙しくて会えない」ということですから I was too busy to see him が一番いいでしよう.

★「私は決して言うまいとおもいました」の「おもった」ですが, 日本語では「決して・・・まい」が前にあるので「おもった」の意味がわかるのですが, 英語で I thought とすると, どういう意味で使っているのかわからないおです. 前に「決して」があるので「決心した; こころに決めた」と解するべきで, したがって「決して言うまいとおもった」は I resolved [decided] that I would never tell ~ that… [I would never say that…とすることになります.

●文構造

「私はそのとき, よもや自分は有名になることはあるまいが, もし間違って将来有名な人間になったとして, どなたかが訪ねてきて下さったとき, せわしいからお目にかかりませんなどとは決していうまいとおもいましたね.」は二つの構造が可能です. 一つは「もし・・・として」の [て] を「動作順次」(and)ととらえて, 「そして誰かが私に会いに来ても」と「もし・・・」の節の中に含ませて if ever I happened to become celebrated and someone came to see me,...とすることも出来ます. もう一つは, 「決して言うまい」の方にかけて「訪ねてきたひとに(・・・と)決して言うまい」として I resolved ... that although..., if ... I would never tell someone who was good enough to call on me that I was too busy to see him. とすることも出来ます.